

第25期・26期新日理事監事合同会議議事録

日時：1990年7月26日（木） 13：30～15：00

場所：気象庁 観測部 会議室

出席者：浅井、竹内、河村、木田、村上、古賀、中村、
小倉、村山、藤谷、青木、安富、松原、安成、
佐藤、浜田、多田

議事

議事にはいる前に、新旧役員の自己紹介を行った。

A. 報告事項

1. 第25期第18回常任理事会議事録は一部修正の上承認された。
2. 各委員会報告

「庶務」

主なものは次のとおり

ア 協力・協賛など名義使用依頼

「第9回海洋工学シンポジウム」

主催 海洋工学コンファレンス

期日 11月11日

会場 神戸国際会議場

「雲を掴む実験」

主催 THE MAGIC MONKEY PROJECT
組織委員会

期日 7月18～20日

会場 KKR 札幌・北大学術交流会館

「会計」

- ・6月分の収支について資料により説明があった出版関係科目が多く支出されているが予算どおりである。

「天気」

- ・7月号の内容と8・9月号の予定が説明された。
- ・個人広告（例えば、本を探しているなど、個人的なものや金銭の授受を伴うもの）は「天気」になじまないのでも委員会としては新しい欄を作ることはむずかしい。

「気象集誌」

- ・7月18日（6月分）まで電子掲示板掲載リストが提示された。
- ・「天気」の委員会で検討した個人広告のことについては電子掲示板に出すことを検討する。

「教育と普及」

- ・夏季大学は計画どおり順調に準備が進んでい

る。参加者は現在80名になっている。

「講演企画」

- ・秋季大会の講演プログラムの編成などのため委員会を8月16日に予定している。

「IAMAP」

- ・日本学術会議に、本年中に第6回総会開催について申請書を出す予定。
申請書には会議のあらましを書くことになる。これまでの IAMAP の総会運営にならって、4種類の基調講演を4会場で行う予定で事務局で原案を検討中である。

（プレジデントの基調講演は人間活動と地球環境とする予定）

このことについて日本学術会議関連研究連絡委員会に説明して大筋の了解を得ている。IAMAP の運営については最終的には1991年にウイーンで開かれる委員会においてホストカントリーとして案を提出して検討されることになる。コミッションメンバーの積極的な意見をお願いする。

「その他」

- ・文部省科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦は研究連絡会が行うことになった。

B. 審議事項

1. 会員の新規加入などについて次のとおり承認された。

新規加入 個人会員 10名

退会 3名

2. 山本・正野論文賞について

河村推薦委員長から報告を受けて、理事長から受賞候補者が報告された。受賞者選定規定にもとづいて全国理事の無記名投票を行うこととした。

3. 堀内基金奨励賞について

廣田推薦委員長から報告を受けて、受賞候補者が報告された。

受賞者選定規定にもとづいて全国理事の無記名投票を行うこととした。

4. 第26期選挙管理委員会の意見

次期の理事会の検討事項とした。

5. その他

・気象学会に対してルーマニアの気象機関の長から proceedings of the WMO/IUGG Symposium 及びその他論文など寄贈依頼があったことについて中村理事から対処方針について検討提案があった。

交換ベース或は積極的に提供するなど意見があったが今回は proceedings を寄贈することとした。

6. 第25期理事長の挨拶

2年の任期の間、それぞれの任務について熱心

にご尽力頂いて感謝している。幸い会員は順調に増加している。会員の構成が年齢的にバラエティーに富んで来ていることにたいして、学会運営について検討が必要になっている。

国内的な活動、又国際的な活動が高く評価される様になっている。皆さんのご協力を得て楽しく仕事ができたと感謝している。今期で退く理事、監事の方には今後とも気象学会の発展に助言を賜りたい。



G.T. Meaden 著 (大槻義彦訳)

ミステリーサークル

一円環効果とは何か

丸善、1990年6月刊

168頁、定価 1,650円

イギリス南部に5月から8月頃にかけて頻発する、円形状の作物被害に関する初めての「科学的な」著書がこのほど、火の玉研究で有名な早稲田大学の大槻義彦教授によって翻訳出版された。

この円形状作物被害がいかに異常であるかは、最切の2枚の写真を見ればすぐに明らかであろう。その円環パターンの多様性とある種の規則性は、3番目に図に表わされている。

われわれ、気象学を学ぶ者にとって、これらの渦巻状のパターンは、明らかにある種の大気中の渦によるものと考えられる。ところが、どんな渦か、と問われると、そう簡単には答えられない。

この点について、読者は明快な解答を期待して、本書を読むかもしれないが、残念ながらそれは得られない。その代わり、作物被害のできた時の目撃証言や、地形との相関など手がかりになりそうないくつかの鍵をひろわることができる。

一方で、気象学者にとってはとまどいを覚えるような記述も出てくる。それは、作物被害が「帯電渦」あるいは「放電渦」、「プラズマ」によってできるとしている点である。著者によれば、それは円の外側にできる逆周りの環やサテライト状の円を説明するのに都合がよいという。さらに世間で UFO (未確認飛行物体) として騒が

れる現象が、実はプラズマ渦ではないかと推測を広げている。

評者は、昨年原著が出たとき直ちに取り寄せ、8月には著者の案内でいくつかのサークルを見せてもらい、さらにその成因について仮説を発表するなどしてきた(科学朝日1990年1月号)。その中で著者のミーデン博士と手紙をやりとりもしてきたが、本書にはその構成上いくつかの問題点があるように思う。

特に残念なのは、渦の崩れ(ブレイクダウン)とか、球電に関するカピツァの理論といった、本書を読み進むうえでのキーワードの説明が無いことである。いくつかの用語は解説が出ているが、十分とは言えない。私信の内容に関わることなのでここで取り上げるのは適切ではないかも知れないが、例えば、私の仮説の中で重要なブレイクダウンの概念について、著者は「そのことについては、本書で触れてある」と主張する。確かに3.2節でパデュー大学のスノウ博士の示唆として書いてあるが、これは168頁(原書では114頁)の本書のうちのわずかに数行である。文献の中にも註が見られるが、取り扱いが簡単である(残念ながら、この註の訳には間違いが多い)。本書が、一般向けの本である以上、たとえ自分が提唱した説でなくとも、丁寧な説明が欲しい。

以上のような問題点は数多く残されているものの、ミステリーサークルに関する(レフェリーを経た)研究論文が皆無の現状では、その形状や地形との関連など本書から得られる情報は貴重なものである。なお、本書が出てからの、研究の進展状況については、New Scientist 誌の1990年6月23日号にミーデン博士による記事があるので、併せて読まれるとよいであろう。

(高知大学理学部・菊地時夫)